〔浪花の風〕七夕には西瓜を賞玩す

〔嬉遊笑覽十上飲食〕西瓜を輪ちがひなどに切ることあり、諸艶大鑑嘉祥喰する處に、西瓜を香の圖に切ちらし云々あり、又番南瓜を木魚に作ることは、天明ごろよりといへり定ならず、西瓜の灯籠、俳諧三疋猿附錄、暮るとも盆の節季は月ありて、西瓜にとぼす橋の行燈、これはたち賣の赤き紙の行燈なるべし、西瓜の肉をほり取て、中に火を點す事は、近きことゝ見ゆ、火光青くみゆるものなり、廣東新語に似たることあり、廣州時序の條、八月十五日之夕、兒童燃番燈持柚火、踏歌於道、曰灑樂仔灑樂、兒無咋糜、塔累碎瓦、爲象花塔者、其塔多、象光塔者其燈少、柚火者以紅柚皮彫鏤人物、花草中置一琉璃盞、朱光四射與素馨茉莉燈交映、蓋素馨茉莉燈以香勝、紅柚燈以色勝、〇略中類柑子、西瓜は卅年來のはやりものにして、今は和歌所へもめしあげらるべかりしを、女房達のきらはせらるゝ方もあるにや、去來抄に、猪の鼻ぐすつかす西瓜かな、卯七正秀云、猪なればこそ鼻はぐすつかしけん、去來云、させることなし、此頃はいまだ上方に西瓜珍し、正秀も珍しと思より、猪の怪しみたるとは風聞出せり、予は西國生れにて、西瓜も瓜茄子の如し、曾て心ゆかず、總じて人の句を聞に、我知る場しらざる場違ひに有べしと有り、西國より漸々京に上りしなり、娘容儀に、奢り者のことを云て、奥樣の御用とて、西瓜の代三百六十五文、新小判にて八百屋が請取て云々あり、大に行はれたる也、

〔國花萬葉記六之三攝津〕諸職人商人買物所付いろは分

す　西瓜　鳴尾新田、同今宮、同天滿、

〔國花萬葉記七下武藏〕江府名匠諸職商人

西瓜賣　四日市日本橋廣小路芝新堀端兩國橋廣小路中橋廣小路京橋南がし四谷鹽町糀町五丁目、此所毎日市有、

〔有德院殿御實紀附錄十四〕砂村の邊にて、小鷹にて、雲雀をからせたまふ事ありしに、折しも六月